

尚綱女学院短大

桂 重樹

○赤木美苗

目的 住宅には様々な間取りおよび室構成が考えられるが、これら住宅の内部構成は居住者の生活スタイルにある程度の影響を与えることが考えられる。一方、内部空間の構成は住宅の規模によってもある程度規定されるといえる。本研究では仙台圏および首都圏でこの1年間に分譲された住宅の間取りおよび室構成をとりあげ、その特徴について分析を行った。

方法 その1と同様の方法でデータの収集を行い、本研究においては住宅の間取り（住宅内の家事空間の連続性）および個室数（和洋室構成）に着目して集計、分析を行った。

結果 間取りについては家事動線に違いがあらわれると思われる台所とその他の空間との連続性に着目して分類を行った。その結果、居間、台所、洗面室、ホールあるいは廊下の間で循環できる型が仙台圏では最も多く、47.9%であった。一方、東京圏では台所から居間を通らなければ廊下にでられない型が45.1%と最も多く、居間が通路空間も兼ねており、落ち着いてくつろげる空間になっていないことが考えられる。個室数については仙台圏のみ分析を行い、LDK以外の個室数ごとに和洋室数の構成を見た。全体的に個室は洋室化が進み、2階に和室がないという住宅も半数にのぼっている。しかし、全体の約8割を占めた個室数4室の住宅のうち96.5%は1階に1室の和室を有しており、その他の個室数の住宅でも1階に設ける個室のほとんどは和室となっていた。このような結果より、生活の洋室化が進む一方で、接客空間あるいは予備室としての和室の必要性は失われていないことがうかがえた。